

問1 平清盛は、娘の徳子を高倉天皇の後とし、その間に生まれた子を安徳天皇として即位させることで、天皇の親戚（外戚）として権力を強めました。このような平氏の政治手法は、かつて平安時代中期に摂政や関白となって実権を握ったどの家系の手法を模したものとイえますか。（2021年 福岡県公立入試 類似）

1. 藤原氏 2. 蘇我氏 3. 足利氏 4. 北条氏

問2 9世紀末に遣唐使が停止された後、それまで取り入れてきた唐の文化を日本の風土や生活に合わせて消化し、洗練させた日本独自の文化を何とイいますか。（2017年 香川公立入試 類似）

1. 国風文化 2. 天平文化 3. 弘仁・伴野文化 4. 化政文化

問3 平安時代中期の地方統治において、朝廷が国司に強い権限を与えるようになった歴史的な背景として、正しいものはどれか。（2016年 広島公立入試 類似）

1. 戸籍に基づき土地を分ける班田収授の仕組みが行き詰まり、国司に徴税を請け負わせる必要が生じたため。
2. 鎌倉幕府が守護・地頭を設置したため、対抗措置として朝廷も地方行政を強化する必要があったため。
3. 大規模な海外貿易が始まったことにより、港を持つ地方都市を直接管理する官吏が求められたため。
4. 刀狩や検地が行われたことで兵農分離が進み、武士ではない専門の行政官が必要になったため。

問4 平安時代の文化において、和歌や物語などの文学が飛躍的に発展し、「古今和歌集」のような優れた作品が生まれた背景として、最も適切な説明はどれですか。（2026年 岐阜公立入試 類似）

1. 漢字を崩した「かな文字」が使われるようになり、繊細な心情や感覚を表現できるようになったため
2. 遣唐使を通じて最新の中国文学が大量に輸入され、漢詩による創作活動が貴族の主流となったため
3. 武士が政治の実権を握り、質実剛健な気風を重んじる新しい文芸様式が確立されたため
4. 印刷技術が普及したことにより、それまで貴族のものだった文学が庶民層へ広く浸透したため

問5 1068年の後三条天皇の即位から、1156年の保元の乱が起こるまでの期間、特に白河上皇によって進められた政治について、その具体的な仕組みとして最も適切なものはどれですか。（2017年 沖縄公立入試 類似）

1. 天皇が位を譲って上皇となり、独自の役所を設けて摂政や関白の力を抑えながら政治を行った。
2. 自分の娘を天皇の後とし、その子供を次の天皇に立てることで、外戚として実権を握った。
3. 武士として初めて太政大臣の地位に就き、日宋貿易による経済力を背景に政治を主導した。
4. 征夷大將軍の地位を得て鎌倉に幕府を開き、各地に守護や地頭を配置して支配を広げた。

問6 日本の歴史における「奈良時代」や「平安時代」といった名称は、どのような視点に基づいた時代区分ですか。最も適切な説明を選びなさい。（2026年 山梨公立入試 類似）

1. 政治の実権を握る組織や施設が置かれた場所に基づいた区分
2. その時代を通じて使われていた元号に基づいた区分
3. 当時の人々の生活様式や代表的な文化の特徴に基づいた区分
4. 社会を支えていた主要な産業や経済の仕組みに基づいた区分

問7 平安時代、遣唐使が廃止されるなど対外関係が変化した時期と重なるように、地方では「国司」による統治のあり方が問題となりました。国司が地方政治の混乱を招いた背景やその実態について述べた文として、正しいものを選んでください。（2024年 高山公立入試 類似）

1. 朝廷が徴税の権限を国司に委ねたため、一部の国司が私欲のために過酷な取り立てを行った。
2. 朝廷が地方豪族を国司に任命する方針に切り替えたため、各地で土地争いが激化した。
3. 遣唐使の廃止によって外国との貿易が途絶えたため、国司の主な収入源がなくなった。
4. 国司が土地の国有化を厳格に進めたことで、自墾地系荘園を所有する農民が反発した。

問8 平清盛の娘である徳子が天皇の後となり、その子が安徳天皇として即位したという関係は、かつて藤原道長が娘を一条天皇の後にした関係性と共通しています。このような、天皇の母方の親族として政治の実権を握る仕組みを説明する言葉として適切なものはどれですか。（2021年 歴史公立入試 類似）

1. 天皇の外戚（がいせき）となつて、政治を動かす権限を持つこと。
2. 天皇の執権（しつけん）となつて、軍事的な指揮権を独占すること。
3. 上皇として院政（いんせい）を行い、天皇の代わりに実務を担うこと。
4. 下地中分（したじちゅうぶん）を行い、土地の支配権を天皇と分けること。

答え合わせ・解説

問1	答え 1 藤原氏	平清盛は、自分の娘を天皇の後（中宮）として送り込み、生まれた子を次の天皇に立てることで政治的な発言力を強めました。これは、平安時代中期に藤原氏が摂関政治を行う際に用いた「外戚（母方の親戚）関係を利用した権力掌握」と同じ手法です。武家政権でありながら、形式としては従来の貴族政治の仕組みを継承していました。
問2	答え 1 国風文化	遣唐使の廃止（894年）により、中国文化の直接的な影響が薄れる中で、日本独自の美意識に基づいた文化が発展しました。これを国風文化と呼び、貴族を中心にかな文字の使用や和歌、寝殿造、大和絵などが好まれました。
問3	答え 1 戸籍に基づき土地を分ける班田収授の仕組みが行き詰まり、国司に徴税を請け負わせる必要が生じたため。	平安時代中期になると、人々の移動や偽りの登録などにより、戸籍に基づいた従来の徴税体制（班田収授法など）が機能しなくなりました。そこで朝廷は、国司に対して「一定の税を納めること」を条件に、現地の統治や徴税方法を自由に決定できる大幅な権限を与える方針転換を行いました。
問4	答え 1 漢字を崩した「かな文字」が使われるようになり、繊細な心情や感覚を表現できるようになったため	国風文化の最大の特徴の一つは、日本独自の文字である「かな文字」の発達です。それまでは漢字の音訓を利用して日本語を表記していましたが、かな文字の誕生によって、宮廷の女性や貴族たちが、日常の感情や自然の美しさをより自由かつ細やかに表現することが可能になりました。これが「古今和歌集」の編纂や、その後の「源氏物語」といった傑作の誕生につながりました。
問5	答え 1 天皇が位を譲って上皇となり、独自の役所を設けて摂政や関白の力を抑えながら政治を行った。	白河上皇は、天皇が幼少期にのみ置かれるはずの摂政や、成人後の関白といった役職を回避するため、自らが上皇として政治を司る「院政」を確立しました。これにより、長く続いた藤原氏の摂関政治を終わらせる土台を築きました。
問6	答え 1 政治の実権を握る組織や施設が置かれた場所に基づいた区分	日本の歴史における時代区分の多くは、政治の中心地がどこにあったかという視点に基づいています。例えば、平城京が置かれた時期を奈良時代、平安京が置かれた時期を平安時代と呼ぶように、政治の拠点（中心地）が変わるタイミングを時代の節目として捉える考え方が一般的です。
問7	答え 1 朝廷が徴税の権限を国司に委ねたため、一部の国司が私欲のために過酷な取り立てを行った。	九世紀後半から十世紀にかけて、政府は戸籍に基づいた従来の徴税が立ち行かなくなったため、国司に対して「徴税の完遂」を条件に大きな権限を与えました。これを利用した国司は、規定以上の税を農民から徴収して蓄財に励むようになり、これに苦しんだ有力農民（田堵）たちが国司の解任を求めて朝廷に訴えるなどの事態が発生しました。この混乱が、自衛手段としての武力の保持、すなわち武士団の形成を促すこととなります。
問8	答え 1 天皇の外戚（がいせき）となって、政治を動かす権限を持つこと。	平清盛は武士でありながら、藤原氏のような有力貴族と同じように「外戚（がいせき）」という血縁関係を利用して権力を握りました。清盛は安徳天皇の外祖父（母方の祖父）となり、天皇を支える名目で一族を高い官職に就け、政治を私物化しました。このように、娘を天皇に嫁がせて生まれた子を後盾にする手法は、日本の古代から中世にかけての権力闘争において重要な役割を果たしました。